

存在論の東西比較

——ハイデッガーとナーガールジュナ——

竹原 弘

I ハイデッガーの存在論

ハイデッガーの初期の主著である『存在と時間』において、ハイデッガーは、人間はまず世界の中に存在することによって、自己の周囲世界に有る存在者に関わる主体であり、そうした主体であることに基づいて認識も成立する、と言う。彼が人間を開示性であるとしたのは、人間を世界・内へ存在と規定したと無関係ではない。すなわち、ハイデッガーによれば人間は、「この存在者にとって、その存在において、その存在自身に関わっている daß es diesem seienden in seinem Sein um dieses Sein selbst geht」⁽¹⁾のである。すなわち、人間が存在するということは、単なる物が或る空間の一部を占めるだけでなく、それが存在していること自身が常に問題である、というかたちで存在している

存在者である。人間はどのように存在することによって、あるいはどのように存在していることに基づいて、自分が存在している場が開ける、そのような存在者である。つまりハイデッガーが、人間を意識とか自我として規定しないのは、人間をその存在の仕方から規定するからである。人間が自らの在り方を常に問題として存在することによって、その存在に基づいて開かれる場を開示性として規定するのであり、従って、伝統的な人間観における如く、単なる認識主体として人間を規定することから出てくる意識とか自我として規定することを避けたのである。

『存在と時間』においては、そのように、人間の存在の構造からあるいはその主体性から開示性を問題としたのであるが、『存在と時間』の方法論を放棄した後期に属するハイデッガーの膨大な著作においては、人間の主体性に由来する開示性から、存在その

ものに由来する開け (das Offene) へと表現の仕方がシフトする。後期ハイデッガーに属する著作群に頻出する開けは、『存在と時間』における開示性が、人間の存在から世界を見た表現であったのに対して、存在自体に由来する表現へと変化していった結果生じた表現である。開けは、『存在と時間』における開示性が、人間が己れの存在から、あるいは己れが世界の中に存在していることから規定された表現であったのに対して、存在そのものが人間の存在していることに對して、自らを示すことの表現である。

後期ハイデッガーは、古代ギリシアの哲學者達の断片、特にヘラクレイトス、アナクシマン드로ス、パルメニデス等の残した断片に對して独自の解釈を加えることによって、この存在の開けについて述べる。

「すなわち、ただ、存在の開けが生起する限りにおいてのみ、存在はそれ自身の自性を人間に委ねる。ただし、現が、つまり存在それ自身の真性としての開けが生起することは、存在それ自身を遣わすことである。存在それ自身は、開けを遣わす²⁾ 歴運である。」

開けとは、そこにおいて様々な存在者が生起する場であり、そこに人間を初めとして、様々な存在者が自らの存在する場を得る開かれた場である。後期ハイデッガーは、様々な形で、その開けが開けである仕組みを記述する。

つまり、存在は諸々の存在者に、それらの存在を、つまりそれ

らが自らが存在する開けを与えることによって、それらを世界の内に存在せしめる。開けとは、先にも述べた様に、『存在と時間』において、現存在の実存性に基づく開示性と表裏一体を為している用語であり、人間である現存在の側から見るならば、それは開示性であり、あるいは存在者の群れではないものとしての無であるが、それを存在の動向から照射するならば、開けとなるのである。ハイデッガーの言う存在とは、結局この開けの動向のことであり、開けが自らの下へと諸々の存在者を送り込み、それらにそれらの存在することを与える動向を、存在と呼んだのである。晩年のハイデッガーは、存在という用語も使用せず、それらの動向を性起 (Ergehnis) と呼んだのであるが、それはこの開けのそうした動向を一言で表現するためであった。

そしてそうした開けの動向を支配し、開けが諸々の存在者にその存在を贈与する、その動向の法則を、ハイデッガーは、やはりギリシア語のロゴスという言葉で表現する。

「しかし始原において、次の様なことが性起する。すなわち、ロゴスは明るみへと齎らす収集 (die offenbarnachende Sammlung) として——存在はそのような収集として *phainō* という意味における適合 (der Fug) であるが——、歴史的人間の本質の必然性へと至る³⁾」

「開け渡すこと (Einräumen)」は開けを支配せしめることである。開けは他のものの下において現存する諸々の物の現われが許

され、人間の住むことはこうした現存する諸々の物へと関わることへと命ずることと理解される。」

「他方、開け渡すことによって、諸々の物が、それらがそのつど何処へ所属すべきかの何処への可能性が用意され、そこにこの所属すべき何処へから諸々の物が互いに所属しあう可能性が用意される。」

「場所 (der Ort) において活動しているのは、諸々の物をその拡がり (Gegend) の中へ解き放ちつつ庇護するという意味での集める (das Versammeln) ことである。」

すなわちハイデッガーが理解するロゴスの意味は、開けが開けの内へと諸々の物を送ることによって、それらにそれらが開けにおいて存在することを可能ならしめる、開けの動向を支配する法則である。ロゴスの働きとしての収集することは、開けへと諸々の物が現成して来ることであり、そのことによって、人間が住むことへと諸々の物を現われせしめることである。ロゴスは、諸々の物、諸々の存在者を、開けの内に配置し、それらが人間が存在すること、開けにおいて住むことへと適合して、人間が住むことを可能ならしめる。ロゴスの収集する働きとは、諸々の存在者を開けの内へと齎らすこと、それらに開かれた場を与えることであり、諸々の物を立ち現われしめる根源的働きである。

開けの動向としての、開けによる開けへの諸々の存在者の送りを、晩年のハイデッガーは、性起と名付ける。そしてそれは、到

来、既在、現前という時間の相互贈与による、存在者への現存としての開けの送りとして規定される。すなわち、開けの内に滞在することは、現存することであり、つまり暫時の間の開けにおける滞在であり、従ってそれは時間的性格を有しているのである。諸々の存在者が開けの中で、自らの存在を得ることが許されるのは、開けによる時間の贈与、時間による開けの贈与によってである。そのことをハイデッガーは性起と呼ぶ。つまり、開けと時間とは、それらの相互贈与としての、諸々の存在者にそれらの開けの内への滞在を与える動向としての性起に属するのである。

後期ハイデッガーは、『存在と時間』における如き、人間の実存的主体性を放棄して、ただひたすら存在の動向に、自らの存在を従属せしめる如き在り方を強調する。そのような在り方において、開けの動向は、人間が日常的に関わっている諸々の存在者の群れの根底にその根源的な姿を現出する。

そうした存在の牧人としての人間の在り方において、開示される世界は、諸々の存在者がひしめく、日常的な人間の在り方に対して現われる世界の根底に存する、素朴な世界である。

「死すべき者は住まうことによって、四つなるもの (Gewert) において有る。住むことの根本的性格は、しかしながらいたわること (das Schonen) である。死すべき者は、四つなるものをその本質においていたわるという仕方に住んでいる。」

「さて、物が互いに一対対して一向かい合っていること (das

Gegen-einander-über der Dinge) を経験するために、我々はまず計量的な考え方をあらかじめ放棄しなければならぬ。(天と地と神と人という) 四つの世界領域を動かして、互いに委ね合わせて、互いに遠いそれら四つの世界領域を動かして、互いに委ね合わせて、互いに遠いそれら四つの世界領域を近付けるもの、が近よ (die Nähe) である。⁸⁾

すなわち、日常的人間に対して現われている諸々の存在者の根源には、このような、死すべき者として人間、天、大地、神という四つなるものが、互いに戯れている素朴な世界、つまり開けの根源的姿が有る。

「時熟しつつ、空開しつつ、この時間—遊戯—空間 (der Zeit-Spiel-Raum) とごう自体なるものは、四つなる世界領域 (der Vier Welt-Gegenden) 、『すなわち大地、天、神、そして人間の相互連関である世界遊戯 (das Weltspiel) を動かす。』⁹⁾

すなわち、時熟し、拡がり解き放つ時空の戯れとしての開け、つまりそこにおいて時間が既在性 (Gewesenheit) と現前性 (Anwesenheit) 将来 (Zukunft) ととして分節されつつ統一されて熟してくる場としての開け、において大地と天、神と人間とが互いに交錯する場が開示される。そこにおいて、死すべき者としての人間は、人間の日常的存在様態を維持せしめる意義全体性としての世界を超えて、四つなる者が互いに遊戯する場であり、世界を意義全体性として成立させるべく諸々の存在者を世界へと送

る、時空が互いに絡まり合って、世界形成を為す世界の根源的動向に関わるのである。そうした世界の根源的開けをハイデッガーはギリシア語に由来する *Angelos* としての真理であるとする。

II ナーガールジュナの空とハイデッガーとの比較

インドの代表的な論師であり、また大乘仏教の創始者の一人であるナーガールジュナ (龍樹) は、彼の最も重要な著書である『中論』において、その後の仏教の根本的な思想となる空について論じている。

『中論』によると、一切のものの関係はけっして各自が独立孤立しているのではなくて、相互依存によって、相互に条件づけあっているというのである。一切の事物は、相互に限定し合う無限の相関関係をなして成立しているものであり、なら他ものとは無関係な独立固定の実体を認めることはできないという主張の下に、*idappaccayata* ということを相依性、相互連関性の意味に解して、独立の縁起説を説いたのである。¹⁰⁾

空とはこのように独立して存在する実体を否定して、あらゆる物は相互に依存して存在している、という考え方であり、こうした考え方は、存在と、その反対の概念である無を超えた新しい概念である。

「火が燃焼に依存している場合とか、燃焼が火に依存している場

合とかにおいては、どちらかがこの世のものとして現われる以前に、それが火、燃焼に依存していることになるであろう。¹¹⁾

「そのような依存関係が現実にある場合には、存在自身さえも、依存関係に支配される。そしてそのように何かが依存関係の中にある場合、それが具体的なものであり、何かが何かと依存関係に置かれているのである。」¹²⁾

「そのような具体的な依存関係にあるものが、存在として具体的なものとの間で、依存関係にあるということが、どうしてあり得よう。そこにおいてはまさに具体的な性質が依存関係の中にあるのであって、依存関係に縛られているということはない。」¹³⁾

空とはナーガールジュナによれば、存在の根本的な相貌であり、日常的には、それぞれの存在者はそれぞれ独立に、他の存在者とは無関係に存在している様に見えるけれども、そうした存在の仕方（の根底）あらゆる存在者の根源的な在り方としての相依的な存在関係が有るのである。それは存在関係とも言えないかも知れない。何故ならば、空は存在と無という存在についてのカテゴリを超えた、存在の仕方であるからだ。

「有と無とは、たがいに対立して空観においては、有と無とのあいだにある共通点がみられる。有と無とは、たがいに対立しつつさらに空と対立している。空とは有無を超越し、相互依存、中道等と同義であり、対立を断ち切る立場である。これに反して有と無とは対立を存続する立場である。『空』対『有無』は、『超対立』

対『対立』の関係である。」¹³⁾

こうした空の考えと、先に述べたハイデッガーの存在論との間に何らかの共通点があるだろうか。

まず、ハイデッガーの基本的立場として、存在者と存在とを峻別し、存在は存在者ではないと主張したことが挙げられる。このハイデッガーの立場は、彼の生涯を通じて一貫していた。既に述べた様に、彼にとつて存在とは、諸々の存在者の群れの根底の、そしてそれらが世界の中に存在することの根底としての、開けによる存在者への存在の送りの動向であった。ナーガールジュナの空も、実体としての存在者が存在することの否定の意味を持ち、あらゆる存在者は相互に依存し合っているという意味であった。すなわち、空とは存在者がそれとして存在することの否定であり、ハイデッガーの言う、存在者ではないものとしての存在と言う主張との間に、共通する要素がある。

「『空』の教義は虚無論を説くのではない。そうではなくて、空はあらゆるものを成立せしめる原理である。それは究極の境地であるとともに実践を基礎づけるものである。もろもろの倫理的価値観を成立させる真の基底である。空の中には何も無い。であるからこそ、あらゆるものがそこから現われてくるのである。たとえていうなら鏡のようなものである。鏡の中には何も存在しない。だからこそ、あらゆるものを映し出すことが可能なのである。（そこで「大円鏡智」という表現が成立する。）空は、すべてを包

括する。それに対立するものがない。空というものは、何もなし
ことであると同時に、存在の充実である。あらゆる現象を成立せ
しめる基底である。それは生きている空である。あらゆる形がそ
のなかからでてくる。そこで、空を体得した人は生命と力に満た
されて、いっさいの生きとし生けるものにたいする慈悲をいだけ
ことになる。」

ハイデッガーもナーガールジュナも、存在者が群れを為す日常
的世界の根底に有る、存在の根源的な姿を見たのである。それは、
我々が常日頃見ている世界の姿ではなくて、そうした日常的な姿
の底に有る、存在者の集合態としての世界をそれとして成り立た
しめている、存在の真の姿である。

ハイデッガーの場合は、あらゆる存在者が群れを為す意義的世
界の根底に潜む、四つなるものの相互連関としての開け、すなわ
ち非隠蔽性としての真理が有るとした。すなわち、天、大地、神、
死すべき者としての人間の相互関係が世界の根源的な相貌である、
と彼は主張する。

ナーガールジュナの場合は、実体としての存在者によって構成
されている世界の根底に有る、存在と無という二項対立を超えた、
あらゆる存在者が相互に依存している世界、を明らかにした。

またハイデッガーの場合、開けの根源的な姿は『存在と時間』
で緻密に分析されている世界の意義性の根底に、あるいはそうした
意義性が喪失された所において、世界の根源的な姿が現われる、

とする。それは、『存在と時間』に連なる思想領域、例えば『形
而上学とは何か』等では、存在者では無いものとしての無として
提示された。

ナーガールジュナの場合には、実体の集合態としての世界の根
底に空としての世界が有り、それはやはり日常的には隠蔽されて
いる。ハイデッガーの言う根源的な開けが、人間の存在の仕方
に応じて開かれる様に、空もやはり自我への執着を脱することに
よって、現われる。

『(よこしまに執着(妄執)されたもの)は虚妄である。』と世尊
は説きたもうた。そうしてすべて形成されたもの(行)は妄取法
である。ゆえにもろもろの形成されたものは虚妄である。もしも
この妄取されたものが虚妄であるならば、そこではなにが妄取さ
れるか。ところでこのことが世尊によって説かれたが、それは空
を闡明するものである。」

このようにして、文化も時代も異なる世界に属する二人の思想
家に幾つかの共通点が見られるという点を何点かにわたって見
て来たのであるが、二人の哲学者は世界を、あるいは存在を、そ
の根源にまで遡って思索したが故に、この様に幾つかの共通する
部分が有るのであろう。

(一) Martin Heidegger: *Sein und Zeit*, Max Niemeyer, Tübingen,

1967, S. 12.

- (2) M. Heidegger: *Wegmarken*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1978, S. 336.
 - (3) M. Heidegger: *Einführung in die Metaphysik*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1973, S. 130.
 - (4) M. Heidegger: *Die Kunst und Raum*, Erker-Verlag, St. Gallen, 1983, S. 8f.
 - (5) *Ibid.*, S. 10.
 - (6) *Ebenda*
 - (7) M. Heidegger: *Vorträge und Aufsätze*, Verlage Günther Neske, Pfullingen, 1978, S. 144.
 - (8) M. Heidegger: *Unterwegs zur Sprache*, Verlag Günther Neske, Pfullingen, 1975, S. 211.
 - (9) *Ibid.*, S. 214.
 - (10) 中村元『空の論理』春秋社 一九九四年、一五五頁
 - (11) ナーガールジュナ『中論』金沢文庫 西嶋和夫訳 一九九五年、八五頁
 - (12) 同書 八六頁
 - (13) 同書 八六頁
 - (14) 『空の論理』三三七頁
 - (15) 『中論』一三・一一二、中村元『空の論理』三三三頁の引用より。
- (たけはら・ひろし、西洋哲学、徳山大学教授)